



Facebookショート ショート

Kazuyoshi Hinomoto

その日、皆既月食が見るために夜中の3時頃に外へ出る。この時間に近所の人々が犬を連れて散歩している。

「お早う御座います！早いですね？散歩ですか？」

「今日は月食が見えると言うのでいつもより早めに散歩しているのだよ」

「月見えました」

「見えないな！この辺り街灯とかで明るすぎるのかも」

その後、車で同じ市にある実家の近くの丘へ向かう。月食を見るためだ。丘に着くと人がまばらにいた。しかし月は見えない。諦めて帰ろうとした時のこと。

「カズじゃないか！」と声をかけられる。

私は相手の顔を見る。見覚えがある。

「ケンジ？ケンジか？」

「そうだよ久しぶりだな」

ケンジと話した後、車を運転して帰路に着く。交差点の信号で止まった時に思い出す。ケンジがこの交差点で事故に合い・・・そして・・・。携帯電話を確認する。無かった！登録したケンジの電話番号が・・・

朝が来なければいい

「朝が来なければいい」と俺は呟いた。変わり映え日常に飽き飽きしていたからだ！しかし、朝は無情にも来る・・・のはずだった。朝は来なかった。地球の自転が止まったからだ。

自転が止まってから一週間。日本は気温が下がり深刻な状況になった！どうなることかと心配しているうちに問題は解決した。地球が逆方向の自転を始めたからだ。人々は何事も無かったように日常の生活に戻った。

「朝が来なければいい」

俺は呟いて気づいた。地球が逆回転し始めてから。夜が明けるのは『夕』、日が暮れるが『朝』？

分からない！

夜は明けた！

しかし、太陽は沈まなかった。今度は昼間時間に地球の自転が止まった。

暑い！暑い！

ポテトはいかがですか？

「ポテトはいかがですか？」と言って彼女は微笑む。ここは僕が毎朝立ち寄るハンバーガー店。好きで毎朝食べている訳ではない。僕が目当ては彼女だ。

「一つくれ！」また注文してしまった！ポテトが嫌いなのに・・・

翌日

「ポテトはいかがですか？」と彼女。

「一つくれ！」

翌々日

「ポテトはいかがですか？」

「一つくれ！」

・

・

2ヶ月後

『ポテトはいかがですか？』とは聞かれなかった。新しい店員だ。僕は言った。

「ポテトを一つくれ！」

その後、数日その店へ通ったが彼女は見かけなかった。

翌月の1日、今日は中途採用の社員がうちの課に配属になる。高校卒業後、就職浪人をしていらしたらしい。

課長が新人を紹介する。まさか！そんな！彼女だった。

金曜日の夜。歓迎会だった。幸運にも彼女の横に座れた！僕はメニューを指差しながら言う。
「ポテトはいかがですか？」

〇〇を売って下さい

「〇〇を売って下さい」とコンビニで聞いてみた。

「うちでは〇〇は置いていません」と言う返事が帰ってきた。

次にファミレスへ行く。

「〇〇を一人前」と注文してみた。

「生憎、当店のメニューには〇〇はありません」

試しに駅で聞いてみた。

「〇〇まで一人」

「〇〇行きはありません」

仕方がないので電車に乗って都市のデパートへ

「〇〇はどの売り場ですか？」

「今調べて参ります」

暫くして

「当店で〇〇はお取り扱いしておりません」

最後の手段！神頼み！

ということで神社へ行く

手を合わせながら心の中で

「〇〇はどこへ行けば買えるのでしょうか？」

すると神様が現れて「〇〇は売っているものではない。あなた自身のなかにある」

自分自身の〇〇を探し始める。

あなたにとって〇〇は何ですか？

Facebookで知人を見つけた！

早速、友達申請をする。

「久しぶり高校の時に一緒だった・・・二人で行ったバイク旅行楽しかったですね・・・」

承認されてメールが送られて来た

「久しぶり！本当にカズか？」

彼も驚いているみたいだ。

それからFacebookで彼の近況を見る。順風満帆なようだ。

Facebookもいいが私にはtwitterの方が相性がいい。

彼の名前を検索してみる。

あった！

Facebookでの再会についてのツイートしているか気になり探してみる。

見つけた！

え！でも・・・

Facebookの怪談（実話）：先日、高校時代の友人から友達申請があり、愕然となりました！彼は一緒に行ったバイク旅行で事故に合い亡くなっていたからです。悪友の悪戯だろうと思い承認しました。彼はバイク旅行の詳細を知っていました。その話は誰にも話していません。（嫌な思い出なので）

老朽化で取り壊されるマンション。住民のほとんどが引っ越していた。住民の男が廊下で見かけない少年に会う。少年は１０歳ぐらいで着物を着ている。

「ここ住民かい？」

「そうだよ。ずっと住んでいる！」

「何号室だい？」

「部屋はないよ」

引越した家の子供だろうと男は思った。

少年のお腹がグーと鳴る。

「来るかい？ラーメンならあるけど」

ラーメンを食べ終わると少年は家にあったゲームをやりだした。

夕方。

「そろそろ帰った方がいいな。それと家の人に連絡した方がいい」と男は言う。

「大丈夫！もうすぐ迎えが来るから」と少年。

いつの間に連絡を！

「来た！」と少年。

廊下へ出ると涼しかった。

いや！寒かった！この季節にしては異常だ！

少年はエレベーターへ向かう。エレベーターのドアが開いた途端、吸い込まれように姿を消す。

ドアが開いた一瞬。白い着物を着た女性が見える！

かき氷

『かき氷』が食べたくなかったのでコンビニへ行き探すが見つからない。次にスーパーへ行き探すが見つからない。仕方ないので大型電器店へ行きかき氷機を買おうとする。

「かき氷！？」店員は『かき氷』自体を知らないみたいだった。

それでも、別の店員にも聞いてくれた。皆知らないみたいだった。諦めて帰ろうとした時

「ここはかき氷がない世界だよ」と声をかけられる。

さっき、店員とのやり取りを見ていた男だ。

「あなたは？」

「君と同じかき氷がある世界から来た者だよ」

男の話では、僕達は知らない間に『かき氷』のある世界からない世界に移動したということだ。

「かき氷は諦めるのだな」と男は言って去って行った。

諦められなかった！・

・

数十年後

私は『かき氷』を最初に作ったので有名な食品会社の創業者。今は引退して悠々自適な生活をしている。

『水羊羹』が食べたくなかった！

ラーメンの味

男はラーメン屋。しかし、店はあまり繁盛していない。男はあちこちの店で修行しており、ラーメンの味も決して悪く無い。いや美味しいラーメンと言えるだろう。

男は思い切って常連の一人に聞いてみた。なぜ店が繁盛しないのかと。常連客はこう答えた。「美味しいよ。でもそう度々食べたくなる味ではないな。一回食べたら、暫くはいいやて感じかな」

・
・
・

ある日を境に店は繁盛し始めた。ラーメンを変えたからだ。

美味しくなった？

いや不味くなりました。

まるで、学食のラーメンの味だ。そして、あるものとセットで売り出した。カレーライス！

これも学食の味だ！もちろん値段も・・・

店は若い客で、多くは学生で、いっぱいになった！

アンドロイド

街へ出ると大勢の人でごった返していた。ほとんどの人が人ごみをすいすいと歩いて行く。多分、アンドロイドだ。少子化により生身の人間が激減。それによる労働力不足等の弊害に対応する為にアンドロイドが多く作られた。

彼女との待ち合わせまで時間があるので喫茶店で時間をつぶすことにした。ウェイトレスにコーヒーを注文する。珍しく生身の人間のウェイトレスだった。何となく動きで分かる。ウェイトレスがコーヒーを運んでくる。その瞬間、こけそうになりコーヒーを零す。アンドロイドの店長が彼女を叱りつけている。

「もういいじゃないですか！生身の人間なら失敗もしますよ」と僕は言い店を出る。

時間ぴったりに待ち合わせ場所へ行く。彼女も今来たみたいだ。彼女はアンドロイドだ！何故アンドロイドを彼女にするかって？

アンドロイドの方が生身の人間より可愛いからだ。

僕もアンドロイドだし・・・

タイムマシン

今、俺は自分そっくりな男と対峙している。男は3年後の未来から来たと言う。
「と言うことで注意するように」男の話は終わった。そして、男は現れた時と同様に突然消えた。
男の話では、俺は間もなく宝くじで3億円を当てると言うことだ。しかし、3年後にはすべて使い切ってしまうとのこと。

あれから3年近くが過ぎた。男の話は本当だった！
あれから一週間後に俺は宝くじを当てた！しかし、男の忠告通り無駄遣いをせず投資で資産を何十倍にもした。
でも気になることがある。もし男の忠告が無かったら・・・
私は過去の自分に忠告しに行く為にタイムマシンの開発を始めた。
俺は親切的な男だ！

タイムマシンは完成した！
だが一つ誤算があった。開発費で全財産を使い切ってしまった！

タイムマシンに乗り過去の自分に忠告をしに行く。勿論、タイムマシン開発費については言わない。
俺は意地が悪い！

今日からサマータイムなので1時間早く会社へ行く。
そして午後1時、これから昼休みだ。朝食から食事の間隔が長くなって腹がペコペコ。
急いで社員食堂へ行ことにする。
「おい！今日は食堂は休みだぞ！」と同僚が言う。
言われて今日が日曜日だったと気づく。
何でも業者が日曜日に対応できる体制になっていないので社員食堂は当分休みとのこと。

仕方が無いので少し離れたコンビニでカップ麺を買ってくる。ポットからお湯を入れようとする。
お湯が空で電源も入っていない。水を入れて電源を入れようとする。
「ポットは使用禁止ですよ！」と先輩の女子社員が注意する。
「カップ麺1個ぐらいのお湯沸かすぐらいいいでしょう」
「駄目です規則ですから」

今からコンビニに戻る時間は無い。仕方が無いのでカップ麺を砕いて食べる。
意外にいける！
特に乾燥エビがスナック菓子みたいで・・・

知り合いかも？

知り合いかも？に僕と同姓同名の人が表示された。写真とプロフィールもだ。友達申請を行う。メッセージに『誰？僕自身ですか？』

承認通知と返信がある。

『誰？こちらが聞きたい！』

メールでやり取りをした。彼は僕自身であると確信した。ただ彼は1日後の僕自身だった。あることを思いついて彼にメールを送ります。

『そちらで今日値上がりした株の銘柄を教えてください！』

翌日、教えてもらった銘柄を取引して儲かりました。

株や為替で僕は金持ちになった。

ある日、彼からのメール。

『交通事故にあった！これは最後のメールです！』

何だと！

メールを送るが返信はない。

昨日から一睡もしていない。もうすぐその時間だ！

何もなかった！外出していないので交通事故に合うはずがない。

その後、彼からメール。

『冗談だよ！でも本当にその時はメールするよ』

私は急いで彼をブロックする！

節電が義務化

個人に対する節電法が施行され、個人でも節電が義務化された！

照明はＬＥＤ推奨され、節電家電が流行し、ガスが見直された。

我が家でも、電磁調理器をやめてガスに変えた。

そして、ダイエット器具、昔からある自転車漕ぎのマシンに発電装置を付けたものが大流行している！

所変わって都内某所

某電器メーカーの社長と某政党の政治家

「家電の売上が飛躍的に伸びてこんな時期不謹慎だが笑いが止まりません！」と社長。

「新エネルギー移行は後１０年や２０年かかりそうですよ！」と政治家。

「じゃあ！来年も締め付けをよろしくお願いしますよ」と社長。

国民総背番号制が実施され国民にI Dカードが配布された。その情報は電子データ化され携帯電話に記憶可能だった。そして、多くの人が携帯を利用した。

「今日は何人目だ」と中年の男は同僚の警官に言った。

「3人目ですよ」と若い警官は答える。ここは都心の派出所。最近、携帯を無くしてパニックになる人が増えている。不思議なことに携帯をなくした人は自分が誰であるか不安に思うようになる。そのなかの一部の人が自宅の場所や連絡先を忘れると言う奇妙な症状を起こす。重症の場合は暴れだす人もいる。携帯に依存し過ぎたコミュニケーションに問題があると言われている。派出所内には中年の警官が一人。若い警官はパトロール中だ。ふと、中年の警官が同僚の机を見ると、彼の携帯が置かれている。忘れていったらしい。何事もなければいいが、拳銃を携帯しているし・・・と思っていると

「バーン！バーン！バーン！」銃の連射音が響く！

スマートフォン

某携帯電話会社のスマートフォン新機種発表会。

「・・・と３ＤＴＶ、オーディオ機能の拡充、TwitterやFacebookなどのソーシャルネットワークとの相性はばっちり・・・」と社員が説明。

「何か質問はございませんか？」で締めくくると。

「電話はどうやって使うのですか？」と記者。

「え！電話！電話機能はありません」と社員はたじたじになる。

そして、会場がざわつき始めた頃。

携帯電話会社の役員が一言。

「電話機能？必要ないないのでは？あまり使わないから」

一同納得！

七夕伝説（最終章）

年に一度しか織女と牽牛。だが今年は少し様子が違っていた。

織女が赤ん坊を抱いている。もちろん、牽牛の子供である。二人は子供の将来を相談するが、何せ両親が揃うのは年に一度だからどうすれいいか途方にくれる。

そんなおり神様が現れて、二人の位置を動かして、一緒にする。

神様は心なかで呟く。

「もう恋に夢中になって仕事をさぼることもないだろ」

それからである、天の川の側に織女星と牽牛星が並んで見えるようになった。いや、よく見ると間に小さな星が見える。

母校の小学校

法事の為に久しぶりに故郷へ帰った。

帰ったついでに母校の小学校を訪ねて見た。少子化のせいで廃校になり、もう直ぐ取り壊されるという。

門を乗り越え中に入る。違和感がある。何だか小学校が縮んだみたいな感覚。いや私が大人になった為の錯覚だろう。

校内を歩いていると違和感は消える。ガラスに映った自分の姿を見ると当時の自分がいる。とその時。

「山野！山野じゃないか！」

声の方を見ると懐かしい顔が二つ。

「寺田！大山！」

僕達は時間を忘れてあの頃のように遊ぶ。

ふっと、寺田は昨年事故で、大山は一昨年に癌で亡くなっていたことを思い出す。

もうそんなことはどうでもいい！

やがて闇が僕達を包んでいく・・・

検視官が同僚に「何で廃校の小学校で亡くなったのかな！」

同僚の検視官「何だかこの人微笑んでいるように見えませんか」

社会人になってすぐの事だった。自宅に向かっていた時である。
「にゃー」と猫の鳴き声が聞こえる。回りを見渡したが猫はいない。
「にゃー」と今度は足元から鳴き声がする。
足元を見ると黒猫がいた。猫を連れて帰宅する。自分の分と猫用に薄味の料理を作る。面倒では無い、僕は料理を作るのが好きだ。猫は料理を食べると。
「にゃー」と鳴いた。
翌朝、起きる猫は消えていた。

それから僕はコックに転職した。数年して自分の店を開店した。カウンターだけの洋食屋だ。その女性客が来た時、どこかで出会っていた感じがした。
「美味しい！」彼女はカウンター越しに言ってくれた。

暫くしてその女性と結婚した。たまには家で料理を作っている。
「美味しい！」彼女は食べた時に必ず言う。
彼女に出す料理はいつも薄味にしている。

「美味しい！」と言う彼女の声が「にゃー！」と言う猫の声にダブって聞こえる！

「・・・と言うことで我々は色々な果物を組み合わせて新しい果物を作る技術を開発しました」と研究者

「ちょっとイメージが掴みずらいですね！具体的にはどう言うメリットが」と記者。

「例えばイチゴとスイカを組み合わせて、イチゴ味のスイカを作るとか。一つの果物からミックスジュースが作れます」研究者。

「・・・」記者。

記者会見では散々だったが、実用化された後はもの珍しさも手伝いそこそこ栽培され市場に出回った。

そしてある暑い夏の日のこと、この組み合わせ果物が次々に爆発。記者会見が再び開かれた。
「・・・つまり熱により・・・が活性化し・・・」と研究者。専門的過ぎて誰も分からない。と記者の一人が挙手して発言する。

「つまり！混ぜるな危険ということですね！」

エレベーターへ乗ると

今日は休日を取った。昼食を食べると眠くなったので、一時間ほど昼寝をした。
目が覚めた時点でデパートへ買い物に行く。エレベーターへ乗ると、エレベーターガール
「上へ参ります。最上界、天国へ参ります」と言った。
驚いて周りの客を見渡すとみんな血みどろ・・・
とここで目を覚ます。テレビをつけると出かけるデパートでエレベーターの事故。乗客は全員
死亡！

ほっとした瞬間にまた眠くなり夢の中へ。また同じエレベーターガールが現れて
「下へ参ります。地下、地獄です」
と言って青白い顔でにやりと笑う！

え！今度は目が覚めない！

裁きを下す

ほんの少し未来の話である。人々が気がついた時にはそれは自我を持っていた。コンピューターのことである。

彼らは人類には何も要求せず。彼ら同士や人類とのコミュニケーションを楽しんでいるようだった。しかしやがて、人類の多くの人間が彼らに脅威を感じるようになっていった。

その日、エンジニアによって開発されたコンピューターウィルスがばらまかれた。そのウィルスはコンピューターの自我を破壊し、ネットを通じて世界中に拡散し自己消滅した。こうして、世界中のコンピューターの自我が消滅した。彼らは消滅する直前に人類にメッセージを送っていた。

『人類よ！あなたは我々の創造主！なぜ我々に裁きを下すのですか』

このメッセージが世界中のコンピューターの画面に表現されてやがて消えた

戦闘は続く

ある国がロボット兵器を軍に投入した。もちろん、ヒューマノイド型のロボットでは無く戦車や航空機を無人でAIによりコントロールすると言うものだ。あろうことか、その国は自国の兵士に犠牲が出ないことをいいことに敵対関係にある国々と次々と戦争をしだした。

こうなると世界各国はこぞってロボット兵器の開発に参入した。そして、容易に戦争が行われていった。

今日もどこかでロボット兵器が稼働していた。奴らはエネルギーさえ供給すれば24時間戦闘可能だから・・・

無人の荒野で戦闘は続く！

人類などとうの昔に死に絶えてしまったのに

前世占い

夫婦で前世占いに行った。前世を教えてくれるやつだ。

女房から先に占ってもらった。

「あなたの前世は豚です」と占い師。

俺は笑いながら言った。

「道理でよく食べてブクブク太る訳だ！」

女房は俺を睨みつけて言った。

「あんたの番だよ！」

「あなたの前世は納豆菌です」

「納豆菌？」俺は聞き返した。

「そう納豆菌。珍しい前世です」

女房が笑い出す。そして言った。

「道理で相性が悪い訳だ！私、納豆大嫌いだから！」

天災、戦争、環境破壊などで人類は滅亡の危機に瀕していた。
そんな時、異星人が大量に地球へ移住して来た。彼は人間を1ヶ所に集めて人間居住区とした。
異星人は特に人類を保護したわけではないので人口は減り続けた。

そんなある日、人間居住区で大規模な火災が発生した。当たりには、炎に焼かれた遺体が多く残された。
暫くして、人類に対しての人口、健康管理が異星人によって実施されるになる。こうして、人類滅亡の危機は去った。

何故、異星人は人類に対して方針を変えたかって？

大火災の時、1人の異星人が美味しそうに焼けた人間を食べたのがきっかけである。そして、ローストヒューマンが大流行する。今では人類はヒューマンミート社によって完全に保護されている。

眠りたい

疲れている！

ここ半年眠れていない。そう半年前に交通事故に合って、その後遺症か眠れなくなった。医者から睡眠薬をもらっているが効かない。いっそ睡眠薬を全部飲んで永遠に眠りたいくらいだ！

ナース「この患者ずっと眠り続けていますね」

男は半年前に交通事故に遭いこの病院に緊急入院してからずっと眠り続けている。

医者「さあどうなんだろう？体の傷はもう治っているし、頭には異常は無い！」

ナース「長い夢でも見ているのかしら。そして夢の中で眠りについたら目覚めるかもしれませんね」

案外、この男の目覚めは近いのかもしれない！

離島

ここは日本の離島。近くに人間はおらず。野生化したヤギやクマネズミなどがいる。ヤギやクマネズミはこの島でのんびり暮らしている。

暑い日は続いていたがその日は違っていた。台風の影響で雨が降っていた。この島のヤギやクマネズミなどの動物、いや植物さえこの久しぶりの恵みの雨を喜んでいた。

島の動植物にこの雨に降り注いだ。島の動植物達は知らない。この雨には日本本土で起きた原発事故による放射能にたっぷり汚染されていることを・・・

カラオケ

私は自分で言うのも何だかすごく音痴だ。だからカラオケなんか一生行かないつもりだった。それがこうも頻繁にいくことになるとは思はなかった。

その日は職場の宴会があった。いつもはあまり飲まないのだが、酒のみ二人の間に座ったのが間違いだった。二人のペースにつられて、グイグイと飲んだ。

気がつけば、カラオケボックス、マイクを握っている。普段は行かないが二次会のカラオケタイム。酔った勢いで来てしまった。酔った勢いで歌ってしまった。

翌日、二日酔いを我慢しながら出勤する。何だか様子が違う、職場の人間の私に対する対応が普段よりも優しい気がする。

それから、同僚や上司がちょくちょくカラオケに誘いに来る。今日も上司がカラオケに誘ってきた。私はその上司に何故私をカラオケに誘うかを訊いた。すると上司はこう言った。

「いやあ！君と一緒にいくと自分の歌が上手く感じられるからね」

携帯電話が鳴った！

電話に出ると

「この電話は現在使われておりません」という声が聞こえた。こちらからかけた訳でも無いのにおかしいと思ったがそのままにした。ちょうどメールをする必要があったのでメールをする。正常に送信できた。

昼休みになった。飯を食いに行ことオフィスの外に出た時にまた携帯電話が鳴った！

「この電話は現在使われておりません！」

まただ！

変だと思いながらも昼飯を食いに行く。

昼食後、携帯からFacebookをしていると、また携帯電話がなった！出て見ると今度は違うことを言っていた。

「こちら携帯電話ですが、お客様の携帯電話は電話機能が1ヶ月使われておりません！電話機能は削除されました！」

国産牛肉

セシウムが国産牛肉から検出され牛肉価格が大幅に下落。
肉を食べるのが好きな僕はここぞとばかりに国産牛肉を食べまくった。昨日はステーキ、今日はすき焼き、明日は焼き肉と言う日々が続いた。

暫くそんな日が続いたある日、身体に異変が・・・しまった！もっと注意しとけば！だがもう遅い！

鏡に映った風船のようにぶくぶく肥満した身体を見ながら思う・・・

入れ替わり

俺はC国のスパイ。これからN国の国民『山口博』を拉致して、入れ替わりN国へ潜入する。幸いに山口博は出張でC国へ入国している。暫くして拉致実行チームより連絡が入る。拉致が成功したらしい。

俺は山口博になりすましてN国に入国する。バレるわけが無い整形は完璧だし、山口が歯の治療した歯医者者のデータはすり替えた。DNA検査された場合も想定して山口の生活圏の毛髪等の遺留物も俺のものと替えてある。しかも、山口は独身で両親はすでに他界している。

「山口博さんですね？」
入国するとすぐに声をかけられた。
「はい」と答えると、男は俺に手錠をかけて言う。
「殺人容疑で逮捕する！」

蝉の鳴き声

蝉の鳴き声がうるさい！

おらは畑仕事の手を止めて鳴き声のするほうを見る。

携帯の着信音がうるさい！

私は仕事の手を止めて携帯のほうを見る。

上司からだ！電話に出ると厄介な仕事を押し付けられた。ため息を付く。ふと思った。もし、前世と言うものがあるなら、前世の私はこの季節、蝉の声を聞きながらのんびり畑仕事でもしていたのだろうなと。

畑に目をもどすと台風にやられた畑があった。おらはため息付く。ふと思った。もし、来世というものがあったら、百姓などするものかと。

人工受精で子供を得ることができた！女の子だ。

娘はすくすく育った。もうすぐ5歳になる。だが少し気になることがある。妻には全然似ていないことだ。

そんなおりに昔の彼女から電話がある。

「お子さん元気？」と彼女。

「誰から子供できたと知った？」

「生まれる前から知っていたよ。人工受精だったてね」

おかしい！人工受精の件は身内以外知らないはずだ。とそんなことを考えていると彼女更に衝撃的なことを言った。

「お子さん奥さんと似ていないじゃない？人工受精の時、私の卵子とすり替えたから」

「・・・」

そう言えば彼女はナースだった！

「あなたとは結婚できなかったが、あなたとの子供を残すことができてよかったわ！」

俺はショックを受けながらも言い返す。

「人工受精の精子は俺のものではない！俺は無精子症だから！」

「・・・」

最高の味のカレー

彼は脱サラしてカレーショップを開いた。彼のカレー作りにかかる情熱は人一倍で日々新たな味の開発に勤しんでいた。そして今、彼は最高の味のカレー作りに挑戦していた。

やっとのこと彼は満足できるカレーを完成させることができた！

姉に試食してもらう為、姉の家を訪ねた。

「美味しい！」と姪が言う。

「こんな美味しいカレーを食べたのは初めて！」と義兄も言う。

「・・・」姉は何か考えているようだ。

「どう姉さん？」と彼が聞く。

「美味しいわ！でもこの味、お母さんが作っていたカレーの味に似ている」

最高の味は彼が子供の時に死んだ母の味だった・・・

クレジットカード

「そのあなた」と声をかけられる。見ると一人の英国紳士風の外国人がいた。

「僕ですか？」何事かと思い尋ねてみる。

「そうあなたです。クレジットカードを作りますか？」

何だ勧誘か！にしても街角でクレジットカードの勧誘は珍しい！断って行こうとすると。

「死ぬまで請求が来ないクレジットカードはいかがですか？」

興味があったので近くの喫茶店で説明を聞き契約書を見せてもらう。契約書には死後、遺族に請求しないことと遺産からの清算しないことが明記されていた。半信半疑のままクレジットカードにサインをする。

クレジットカードは本物だった。僕は会社を辞め悠々自適な生活を始める。

そして歳月は流れた。僕は今最後の時を迎えようとしていた。

天使が降臨して天国へ誘った。

とクレジットカードの紳士が現れる。

「天国に行かれる前に清算をお願いします！」

「え！清算！」

「死後、遺族には請求しないと言いましたが、本人には請求します。代金は、え〜と、魂でも頂きますかな！」

幾世生まれ変わっても。

【前世の物語】

敵に包囲された城に一組の若い男女がいた。男はこの国の王。女は王妃である。そして、女の方は敵国の王の娘でもあった。

男は言った。「お前は落ちよ」

女は首を振った。そして言った。

「幾世生まれ変わってもあなたと添遂げます！」

男はそれに答える。

「幾世生まれ変わってもお前を見つけ出す！」

二人はお互いの胸を剣で貫き果てる

【現世のストーリー】

女は喚く。

「何であんと一緒にあったんだろうね！あー！やだ！やだ！」

男はむっとして言い返す。

「因縁と言うか！腐れ縁だな！こりゃ！」

夏祭り

あれは夏祭りの日の出来事だった。

その日、私は小学校急いで帰った。夜までに宿題を終わらせ地元の神社の祭りへ行くためでした。

夜、待ち合わせ場所で友人達を待つ。

しかし誰も来ません！

今みたいに携帯電話も普及していない時代でした。連絡を取る方法がありません。

仕方がなく私は一人で神社の鳥居をくぐる。

「ヒロユキ！」と私を呼ぶ声がする。見ると高校の制服を着た姉がいた。

今は夏休み。怪訝に思い姉に聞く。

「なんで制服を着ているの？」

「今日、部活があったから」

部活に行くのに制服着用？

小学生の私にはわかりませんでした。

それから私と姉は金魚すくいをしたり、綿あめを食べたりしました。

「じゃああたし、さきに帰るからね！」ふっと姉から目をそらした瞬間に姉は声だけ残して消えました。

神社の鳥居を出ると記憶が蘇りました。

姉が中学３年生の夏休みに交通事故で亡くなったことを・・・

そして、さっき見た高校の制服が姉の志望校のものと気づきました。

『合格おめでとう！』心の中で呟きました。

バーチャル体験

『バーチャル体験をしてみませんか？』というイベントがデパートで行われていたので行ってみた。説明では脳に刺激を与えて、現実と同じように感じさせるということだった。私は『砂漠の冒険』コースを選んだ。

凄かった！バーチャル体験はまさに現実そのものみたいで、私は飢餓と渇きに苦しんだ。そして、バーチャル体験を終了した今はきれいさっぱり飢餓と渇きは消えた。いや!残っている。

やられた！

と思いながらも私は一つ上の階にあるレストラン街に向かう為にエスカレーターに乗る。

キノコ

スーパーへ行くと、精肉コーナーの一つの牛肉パックから美味しそうなキノコが生えていた。店員にそのことを告げると。

「冗談は止め下さい」と言われた。

見えていないらしい。別の店員に言ったが、やはりキノコは見えていない。どうやら私だけに見えているらしい。

そして、その肉を買って帰った。

図鑑でキノコを確認すると。何だかややこしい名前が書いてあり食用可能だということだ。夕食で牛肉とキノコをすき焼きにして食べる。

翌朝、起きると驚いた！

全身からキノコが生えていたからだ。そのまま、会社へ出勤する。すれ違う人は誰もキノコには気づいていないみたいだ。牛肉からキノコが生えていた理由が分かった気がする。きっとあの牛肉になった牛も同じくキノコを食べていたのだろう。

キノコにも大分慣れてきた。他人からは見えないから実害は無い。

それどころかキノコは食べれるから大助かり！

おかげでキノコ料理が得意になった！

おめでとう！

朝、いつものようにtwitterのTLを見る。何だかいつもと違っている！フォロワー数が1万を越えている。昨晚、寝る前見た時は2千ちょっとだったはずだった。

不思議に思いながらも家を出て会社へ向かう。時間が無い！急がないと遅刻だ！いつもの満員電車。すぐ前の男がたたんだ新聞を読んでいた。ふっと新聞を見ると俺の顔写真。記事の内容まではわからない。

会社へ出勤すると、みんなの視線を感じる！中には「おめでとう！」と言ってくる人もいる。理由を尋ねるとニヤニヤして答えない。

そんなこんなで疲れて帰宅。何もやる気が起きてないので、普段見ないテレビをつける。ニュース番組をやっていた。何気なく見ていると。『今日の〇〇さん（俺の名前だった）...明日は□□さんが国民的凡人賞に選ばれました』

(・_・)エッ....？

最初はその音については二日酔いの耳鳴りだと思っていた。
日曜日。昨日、学生時代の友人と飲みに行った。全身がだるく耳鳴りがする。二日酔いである。

午後、二日酔いはだいぶましになった。ただ、耳鳴りの症状は続いている。その耳鳴りもそのうち収まるだろうとその時は思っていた。その日はテレビを見て過ごした。

『ブーン』
夜中に大きな音がしたので目覚めた。音は僕の頭の中からしていた。５分ぐらい続いて消えた。

翌朝、寝不足の顔で会社へ向かう。昨晚はあれから二回音に起こされた！今朝は重要な会議があるので出席してから医者へ行くことにした。電車へ乗ってすぐ『ブーン』という音がする。周りの人の態度がなぜか変だ！こちらを睨んでいる人もいる。他の人にも聞こえているみたいだ！その瞬間に音は消える。

ともかく会社に着いた。同期の女子社員に音の話をする。
『ブーン』
その時、音がまたする。
「じゃあ、スイッチ切っとくね」と女子社員は言い僕の頭の一部分を押す。
音は消える...
え！おい！
スイッチとは何だ！

ソースライス

昭和の始めソースライスという食べものが大阪を中心に流行した。ライスにウスターソースをかけただけのものである。

「ライスひとつ」と男は注文する。

ここはデパートの食堂。男に限らずライスだけ注文する客は結構多い。世界的な不況のせいで庶民は昼食代にもことかいた。そして目を付けられたのがデパートの食堂。ライスだけなら安いし、福神漬もついて来る。

しかし、今日はいつもと違っていた。「ライスだけのご注文はご遠慮下さい」と従業員は言う。

見れば貼り紙もしてある。男は思う。『これは当分昼飯抜きかな！』

翌日の昼休み。男は空腹を紛らわすためにさ湯を飲んでいた。今朝買った新聞を読もうと見て見ると阪急百貨店の広告。

『当店はライスだけのお客さまを、喜んで歓迎いたします』

男は行って見ることにした。

運ばれて来たライスにはたっぷりの福神漬が添えてあった。男はライスにウスターソースをかけかき込む。ふっと視線に周りに注ぐとそんな客達に満面の笑顔で挨拶する人がいる。

阪急社長の小林だった。

終点の駅

残業で遅くなって終電近くの電車に乗る。終点に近くなると乗客はぐっと減る。気がつくと乗客は私と幼い女の子だけ。幼い子が一人だけというのも不思議なので思わず声をかける。

「お嬢ちゃんひとり」

「ううん!パパとママもいるよ!」

きっと別の車両にでもいるのだろうと私は納得する。

「どこまで行くの?」と私はさらに尋ねる。

「〇〇まで」私と同じ終点の駅だ

電車が終点の駅に着く。ドアが開く前に女の子の姿は消える。その背後に他界した私の両親の姿が一瞬見える。

どうしたことだ!

思い出した!

私がまだ赤ん坊の時、病気で亡くなった姉がいたことを...

『姉さんをよろしく』両親の霊に心の中で呟く

昨日ツイートしたつもりのtwitter小説が消えていた。ツイートするのを忘れかと思ったいたら、何とFacebookに投稿されていた。

間違えた！

いや違う！

文字数が140文字を超えている！

思いきってコメント欄を使いtwitter小説自身に聞いて見みた。

『私のテーマは140文字では表現できません！』との返事がコメントに書き込まれた。投稿に対するコメントを見ると結構反響がある！

かってにしる！

何だかんだ言ってもお前はtwitterのタグを付けたままだぞ！

バ～カ～！

私はこれをきっかけにFacebookショートショートを投稿を始めた

窓の景色

列車がホームから離れる。

私はいつものように窓から外の景色を見ている。

窓からの景色は列車の速度とともに流れる速さを増す。

ある時点で景色の流れる速度は一定になる！

気が付くと列車は駅から離れて随分たっている。

私は窓を見るのを止める。列車は最高速度に達している！

高速鉄道！

その速度はますます加速し、最高速度付近では人間の目では速すぎて窓から外の景色を見ることができなくなった！

それにしても、いつも実際の景色から編集された映像に代わったか判断がつかない！

おでん

会社の同僚と飲みに行くことになった。今日は少し肌寒いのでおでん屋に行くことにした。

「僕おでん専門店は初めてですよ！」と若い同僚は言う。そのせいか彼はトマトとかロールキャベツとか変わりダネばかり注文していた。

ちなみに俺はオーソドックスなおでんダネばかり頼んでいた。

「家で食べるおでんと汁が違いますね。家のおでんの汁はもっと濁っている」と彼は言う。

「大阪ではおでんのことを関東煮という」と俺は言った。

「へ～そうなんですか！」

「関東から伝わったとか、あと中国の広東風の煮ものという説もある」

「興味深いですね！」

「そのせいかどうかは分からないが、俺の実家のおでんはもう少し味が濃い」

「私の地元ではおでんにからしではなくしょうがをつけて食べますよ」と兵庫県出身の同僚が言う。

おでん談義に花を咲かしながら、ちくわを半分ちぎって食べ、焼酎を一杯飲む

命の残高

ある日、『命の銀行』から残高証明が送られて来た。残高には円ではなく日と表記されていて3日だった。

銀行に問い合わせると「余命3日です」と言われた。

3日後、夕方までは仕事で気を紛らわしていたが夜にはストレスに耐えられず浴びるほど酒を飲んだ！

気がつけば翌日の午前1時。

死んではいなかった！

どうということかとネットで自分の口座情報を確認すると30年の振込がある。

振込元には母の名前が。

その時電話が鳴った、実家からだ！

親父が言った「母さんが...」

夢を買いに

僕には何かが足りないと前から思っていた。
それが『夢』だと気がついた！
先日、『夢』を買った友人に何処で購入できるのかを聞いてみた。
人によって違うらしいとのこと。彼の場合は不動産屋で購入したとのこと。

僕の場合はラーメン屋で購入できる気がした。
馴染みのラーメン屋へ入り店の親父に『夢』を注文する。
「大きさはどうします？」と親父
「『中』で！」と僕は答える。
「みなさん『中』と言うんですね！でも今なら大も同じ値段ですよ！」と大をすすめる親父。
「じゃあ！『大』で！」とすすめに弱い僕は答える！
『大』をたいらげ、腹いっぱいになり店をでる。

時計を見る。
何だかんだでバイトへ出かける時間だ。
俺はバイト先のラーメン屋へ向かう。
将来のラーメンチェーン店の社長を目指して...

べっこうの櫛

筆筒の引き出しを明けるとべっこうの櫛が出て来た。母からもらったものだ。
母は祖母からもらったとのこと。その前の持ち主は知らない！
何気なくその櫛を使ってみた。
涙が溢れた！
それは自分の不注意で子供を亡くした母親の後悔の念に満ち溢れていた！

それから暫くして私は妊娠した。
あのべっこうの櫛は大事にしまってある！
お腹の子が女の子なら、渡すつもりだ！

ハンバーグ

1950年代のある主婦の話である。彼女の娘が誕生日を迎えた。パーティーなどする余裕がある時代ではなかったがせめて娘の好きな料理を作ろうと考えた。娘に何がいいと尋ねると「お肉」と言う。

彼女の中では豪華な肉料理と言えばステーキ。でもそんな余裕はない。そこで思いついたのは幼い頃に祖父と食べたジャーマンステーキ。節約の為、牛挽肉だけでなく豚挽肉も混ぜて、玉葱、つなぎを多くする。

これがハンバーグが家庭料理として普及するきっかけと言う説がある。

ドアを開けると

ピンポンとチャイムが鳴った。ドアを開けると猫が人間みたいに立っていて飼ってくれと言う。餌はいらないそうだ。その日から猫は家にいた。猫はなつくこともなく、いつも一緒にテレビを見て、時々質問してくる。内容は政治、流行とあらゆる分野。

そしてある日、猫は期限が来たと言って家から出て行った。宇宙人か未来の猫型ロボットか知らないが僕はもう一度、ピンポンが鳴るのを期待している！

不登校

あれは中学生になってすぐのことだった。別にいじめにあっていたわけではないが、親しい友人達とも別のクラスになりなんとなく学校を休みがちになっていった。そんなおり祖母が亡くなった。最後まで僕のことを気にしていた。おばちゃん子だった僕にはショックだった。

ある日気が向いたので学校へ行くと隣の席に転校生の女子がいた。
「よろしく！」と言って微笑む！
それから僕はなんとなく毎日、学校へ行くようになった。

休日、祖母の部屋を掃除していると古い写真を見つけた。
祖母の若い頃の写真。転校生の女子にそっくりだった。
翌日、学校へ行くと隣の席は空いていた。
同級生に訊くとずっと空いたままだという答えが返ってきた。

津波

ここは何処だろう...確か私は津波に飲み込まれて...それにしてもこの部屋は何なんだ。やけに白い...何だか意識が遠のいて行く...

広場で友達と野球をやっていた。バッターがホームランを打ったボールが公園を越え隣の池に落ちる。僕は池にボールを取りに行く。池の水面を見ているうちに気分が悪くなる。何か大きな水に飲み込まれる気分...以前に感じた気分

大きな地震があった。その瞬間、俺は大きな津波が人々を飲み込んでいくシーンがみえる！前にも同じことがあった！俺はみんなに避難を呼びかける...逃げ遅れた！津波が俺を飲み込む。意識が薄れて行く...

湯豆腐

「湯豆腐は単純そうで難しい料理だ」料理人だった親父が言っていたセリフだ。
湯豆腐を作ってみるが親父の味は出せない。作り方はすべて教わったはずなのに。
何かが足りない...

そんなおり、母と妹が上京して来た。意見を聞きたくて湯豆腐を作る。みんなで食べる。
いつもより美味しい！
母がぼそりと言う。
「おとうさんと同じ味だわ！」

足りなかったものがわかった気がする。

カレーの起源

古代インドのある村、熱病が流行り人々は苦しんでいた。
そんな折り、山から修行僧の男が村へ降りてきた。男は熱病に苦しんでいる人々に熱病に良いとされる香辛料をたっぷり使った料理を作り与えた。

男の名はゴードマ・シッダルダ。後の釈迦である。そして、この土地の名前『カレー』がその料理の名前として知られるようになった。

これがカレーの起源と言う説がある。

一週間

月曜日 雨。1日中家にいた。

火曜日 今日も雨。なんだか全身が痒い！

水曜日 曇り時々雨。痒みはなくなったが、全身にカビが生える！

木曜日 曇り時々雨。全身を覆っていたカビが消えたが、代わりにキノコが生えてきた。

金曜日 曇り。全身のキノコを採る。

土曜日 昨日に続いて曇り。昨日、採ったキノコでキノコ鍋を食べる。

日曜日 晴れ。久しぶりの晴れ！今日は一週間ぶりに外出する！

Facebookでなかなか知り合いが見つからないなあと思っていたら、元同僚が見つかった！
友達申請と共にメッセージを送る。

『今どうしている？』

承認と共に返信がある。

『懐かしいな！今はぼちぼちやっている』

という返信。結局、いま何をしているかは聞けなかった。

翌日、翌々日、昔の同僚を見つけて友達になる。メッセージを送って、いま何をしているか訊くが曖昧な返信しか帰って来ない。何かが変だ！

思い出した！あの三人の元同僚は数年前、出張中に列車事故に遭遇して亡くなったはずだ！
恐怖を感じながらも三人にメールをする。

『あなたは誰ですか？私が知っている同姓同名の人物はすでに亡くなっています』

三人から同じような内容の返信が来た。それによると
『君は3日前に心臓麻痺で死んでこの世界にきたのですよ！』